

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日通郵省特別掛承認第六二七号
平成二十三年二月一日発行(第四百十四巻第二号)

ホトトギス

二月号



俳句随想 〔三百四十四〕

汀子

「朝日俳壇選者と共に」、というイベントが大阪朝日カルチャー主催で毎年開催されるようになって久しい。今年も松山に於ても開催され六百近くの人々が参加され成功裏に終わった。大阪では十一月三十日に開催された。兜太、汀子のバトルを聞きたいというマンネリズムには辟易するが、お互い言いたいことをはっきり云うのはやぶさかではない。

投句数は二百十八句で、一人が二句出句である。四選者が同じ句を選ぶのは少ないが、私以外の三人の選者、兜太、權、章たちが選んだ次の句に私が問題を提起した。「生まれ来る孫の布団に頬摺りす」がその句である。私は「未だこれから生まれてくるのだから、布団がどのような状態で置かれてあるかは分らない」と言った。縫ったばかりの布団はベッドに用意されているのか、或いは箱に仕舞ってあるのか、押入れに入っているのかと質問した。俳句は作者の位置がはっきりしてなければならぬし、この句の作者の位置はわからないと私は言い、三人相手に打々発止とやり合った。

また、孫の句は可愛さに寄り掛かった句が多く、私は余り賛成出来ないとも言った。

句日記

汀子

平成二十二年二月一日 ロイヤル俳壇

旅予定増え臘梅の門出入り
バスポート出して確かめ春隣
講演の準備足らずも春隣
なるやうになる旅日脚伸びにけり
旅疲れ消え臘梅の香を纏ふ

二月三日 祝「冬野」

老いし木も若木も冬野彩れる
重ね来し月日牡丹にとどまれる

二月六日 芦屋ホトトギス会

春寒の旅共にせし避遁に
春寒や週に二度ある旅終へて
旅帰りちらちら春の雪もよひ
考への及ばぬことも春寒し

二月七日 下萌句会

冴返る旅のよそほひ心して
たちまちにほころぶ梅の日向かな
済みし会これよりの会梅日和

二月七日 悼 山田弘子様

なげ急ぎ逝かれしや寒明けたるに
二月九日 大阪倶楽部

その席に供華飾られて冴返る
悲しみは言葉にならず冴返る
庭の雪解けしも主還らざる
皆言葉失ひて冴返りたる
春時雨なごりの道を歩き来し
弔辞書き終りし窓の春時雨
みよし野の旅の段取り梅二月

二月九日 綿葉倶楽部

仕残せしこともあるべし冴返る
仕残せしことにかゝりぬ梅二月
待たされてゐるを樂しみ下萌に
悲しみてをりしばかりに梅寒し
紅梅の咲けばこれより計の記憶

二月十一日 清交社

早春の雨に悲しみさそはれて
鶯も鳴きつまづいてをりしこと
早春の別れといふはとつげんに
水菜とて一品となるフルコース
早春の雨に誘はれたる計音
突然の悲しき計音春浅し

二月十二日 工業倶楽部

悲しみはやがて消えゆく春浅し
逢ふ人と存問建國記念の日
明るさをそこより広げ猫柳
二月十六日 無名会出句
定まらぬ陽気に春の浅きこと

その日より心弾まぬ春浅し
悲しみは胸に納めて梅に立つ
紅梅の咲きて歴史をつなぐ館
早春の雨が伝へてをりしもの
早春の旅終へ時差の一時間
早春の予定変更許されよ

二月二十四日 夏潮句会

薄水の如き命でありしかと
朝の間の薄氷消えてをりしこと
心癒えたまへ薄氷失せぬ間に
一弁の散りし紅梅力抜け
現実を諾ふことも春寒し
梅が咲き芝が萌ゆるも君在さず

二月二十五日 きさらぎ会

猫柳そこより早き流れかな
鰯鮎ありしこと春寒をつのらせる
かかる鰯鮎にも対処してあたたかし
凍解の進む日和となりしこと
旅帰りたる句日の凍解に
あたゝかき思ひ出ばかりありしこと

二月二十六日 時雨会

下萌に至福の雨となりしこと
悲しみは悲しみをよぶ睦月の計
たゞ予定重ねて過ぎてぬし睦月の計
ふり返る時間睦月でありしかな
友逝きし睦月七日を栞りたる

廣太郎句帳

廣太郎

二月八日 朝日カルチャー若草句会

二月二十一日 虚子記念文学館投句

信じられぬ事が起りて春浅し

梅が香にこの悲しみを解かんと

箒目の崩れし辺り春浅し

二月二十三日 若水句会

二の午の淋しく暮れてゆきにけり

下萌ゆる大地に気持立て直す

二月十日 山田弘子様二月七日御逝去 御通夜

大雪崩とは人間の心にも

暖かく君を導く星として

下萌や虚子の懐とは広し

二月十一日 土筆会

下萌の一步を踏みて通夜の灯へ

平成二十二年二月一日 はせを句会

かまくらの上にあなたの星加へ

言の葉を選ぶ術なく梅が香に

雪雲に都市の輪郭失へり

人生れ人逝き地球下萌ゆる

梅寒し君の笑顔に救はれて

彼の日より碧梧桐忌に親しみて

猫柳雨に躍りて日に沈み

二月二十三日 百夜句会

鳥総松影を省略してをりぬ

凍返る一夜の旅となりにけり

木の実植う一つは君の未来へと

祝ぎの座となりし一会や日脚伸ぶ

二月十六日 草木瓜会

山茱萸の花に喪心恋心

二月四日 蕉心会

雪舞うて君の心を白くせり

逝きし人遺されし人月朧

残雪にみちのくの人閉ざされし

バレンタインデー初七日と聞けばなほ

絵踏無き世の悲しみといふも又

東京を白く塗り上げ春立てり

遺されし人の決断残る雪

二月二十四日 目黒学園句会

白梅よ花を散らすな香を散らせ

二月十八日 登高会

梅見茶屋今日もあの娘に会へさうな

日差得てより梅が香の立ち上る

針供養偲ぶ心も持ち寄りて

梅見客歩幅小さくなつてきし

野の香り庭に鏤め春立てり

立春といへど天与の試練かな

梅見客とはちらくと思々

立春のベンチおつさん喋りづめ

人も又土に還るや針供養

下萌や神の計画とは思議

水温む音の流れでありにけり

針供養もう会へぬ針会へぬ人

一輪の香より梅見となりゆけり

彼の君は二月礼者として来る

その中に希望の光路の臺

春時雨この路地出れば先斗町

雑詠

廣太郎 選

秋風に穴のあきたる大飛球 神戸 立村霜衣
 逆転本壘打四万人秋思 同
 うそ寒しせめても歌へ球団歌 同
 未だ名を貫はぬ月を愛でにけり 同 長山あや
 満ちてゆく月の鼓動の刻々と 同
 金色の瀬音良夜の故郷かな 同 徳島 上崎暮潮
 踊より歸りてもなほ遠離子 同
 妓の流し絶えて幾年阿波踊 同
 法師蟬声の混雑して終る 同 熊本 岩岡中正
 鶏頭のかゝ放ちある子規忌かな 同
 秋風が手にとるやうに見えて山 同
 秋風裡ふとたてがみの欲しきかな 同
 虚子の文字泊月の文字秋扇 神戸 山田佳乃
 秋灯古き句集の並ぶ部屋 同
 ふだん着に戻れるところ草の花 同
 叡山の風となりきり花芒 奈良 古賀しづれ
 爽やかや風の姿に雲ほどけ 同
 コスモスといふ美しき風の束 同

鎌倉に虚子の聞きたる虫を聞く 福山 竹下陶子
 掛軸の虚子に見られて昼寝かな 同
 秋蝶のわが掌に怖れなく遊ぶ 同
 失せてより恐怖つのりし穴まどひ 八尾 山下美典
 オリブの実の色づいて海を恋ふ 同
 稲垂るる日照り疲れといふ色に 同
 霧に消え再び現れし同じ景 樺原 稲岡 長
 天高く虚空の果のどこまでも 同
 廃院と決めし老医の秋思かな 同
 別のごと富士は大きく天高し 熱海 嶋田 一步
 虫の闇果てに富士あり灯もありし 同
 虫の闇とぎれて海の波の音 同
 啄木鳥の叩けば耳を寄せ合ひぬ 香川 湯川 雅
 鯛雲つぶしてゆける雨意の雲 同
 勾配にくぼりて木の実坂となる 同
 さらさらの空をさらさら秋の雲 東京 橋本くに彦
 渡り来し鴨ねむたくて眠たくて 同
 風力は目に見えるもの花芒 同
 淡路よりつづく旅路の夜々の月 京都 安原 葉
 子規偲び仰ぐ十七日の月 同
 霧はれてきたる夜景の大会堂 同
 露の世の大会知事も高僧も 神戸 千原 叡子
 子規居士と忌を同じうす汝が御霊 同
 吐息にもさゆれて卓の花芒 同

雑詠句評（二月号より）

葉　・美　奇・眞理子
中　正・千鶴子・芳　子
憲　明・とほ歩・静　龍
保　佳・むつみ・廣太郎

手から手へ闇をなぞりて風の盆 多摩 松井秋尚

富山県八尾の「風の盆」は毎年九月一日から三日まで行なわれるが、胡弓の加わった地方の囃子に合わせて群集が「越中おわら節」を唄いながら、夜を徹して踊り通すので有名。その風の盆の踊り手の、手の動きに注目して詠まれた句である。「手から手へ」とそのしなやかな手の動きを捉え、さらに「闇をなぞりて」とは、まさに絶妙。風の盆の雰囲気が見事に伝わってくる。

（葉）

某演歌歌手の歌った、このイベントを題材とする歌の大ヒットによって一躍有名となり、今では毎年観光客が溢れるというこの「風の盆」である。九月一日から三日間夜を徹して踊り明かすの

である。特に女性の手捌きを表現しているのだろう。うら悲しい胡弓の音色に乗った優雅な姿が見て取れる。（廣太郎）

虚子偲びつつ新涼の小諸訪ふ 京都 安原　葉

昭和十九年九月から二十二年十月まで、虚子は信州小諸に疎開された。今年の北信越ホトトギス俳句大会は長野県の当番で、二日目は小諸に吟行した。虚子の草庵や句碑、虚子の散歩道を辿る皆はそれぞれに「虚子先生を偲ぶ」思いがあった。

作者は虚子の薫陶を受けられた、今は数少ない方々の一人なのだ。深く「虚子偲びつつ」、よみがえるような心で「新涼」の小諸を歩かれたことであろう。何という季節の素晴らしさ。

（美奇）

小諸といえば、虚子が戦中戦後の一時期疎開していた町である事はどなたも御存知であろう。秋に入って間も無く、作者はここを訪れたのである。現在では虚子記念館も建てられ、数々の虚子が遺した軸等を見る事が出来る。実際虚子の薫陶を受けた作者ならではの感動が伝わってくる。（廣太郎）（以下略）

天地有情

小さく燃ゆ平家の里の門火かな
祈りの手十字を切りてより残暑
分け入れば分け入るほどに露寒し
行くほどに隠るるほどに吾も芒
星仰ぐ野に佇めば鉦叩
山寺の夜の静けさよ鉦叩
秋思とははるかな思ひありにけり
水音に促されぬる秋思かな
叡山といふ杉襖霧襖
鴨を待つ大琵琶がらんどうにして
谷底の霧の泊りといふ異界
霧走り一山の闇走りけり
平凡な一日として子規忌過ぐ
水の星火の星草の花の星
大神の涼しさに居て動かれず
心頭の滅却できぬ浴衣翁
長者森守る祠とや露じめる
長者森平家伝説身に入むや

東京 稲畑廣太郎
同
神戸 三村純也
同
京都 安原 葉
同
樞原 稲岡 長
同
奈良 古賀しぐれ
同
神戸 長山あや
同
東京 今井千鶴子
同
福山 竹下陶子
同
萩 刀禰小勇

銀河濃し祈りを忘れたる我に
銀漢や珊瑚の砂を踏めば鳴る
子に眩し母のクロール平泳
水がまだ味方についてぬ泳ぎ
水郷の初秋といふ明るさに
鈴虫を鳴かせ文学館の屋
八月や風が起れば風に謝し
八月や野は潤ひを蓄へず
来し風の細かくなりて萩の花
揺れ乱れしばらくありてこぼれ萩
連発の花火これでもかこれでもか
青空に時にとどまり赤蜻蛉
追うて来る夕霧ロツジまだ見えず
宵闇の一番星の頼もしや
秋遍路めき一石に一木に
遺影にも告げる新米届きしを
暁闇といふ露けさの中にゐる
早世の詩人を語り夜の秋

徳島 上崎暮潮
同
神戸 後藤比奈夫
同
たつの 浅井青陽子
同
岩見沢 奥田智久
同
熱海 嶋田一步
同
同 嶋田摩耶子
同
東京 河野美奇
同
石川 辻口八重子
同
熊本 岩岡中正
同

江子選

天地有情句評

汀子

叡山といふ杉襖霧襖

奈良

古賀しぐれ

幽玄の世界。

祈りの手十字を切りてより残暑

東京

稲畑廣太郎

谷底の霧の泊りといふ異界

神戸

長山あや

信仰の中の現実。

行くほどに隠るるほどに吾も芒

神戸

三村純也

水の星火の星草の花の星

東京

今井千鶴子

有名になる前の曾爾高原。

星仰ぐ野に佇めば鉦叩

京都

安原葉

心頭の滅却できぬ浴衣翁

福山

竹下陶子

人間も自然の一部

秋思とははるかな思ひありにけり

樞原

稲岡長

現実を大事にすることで寛ぐ。

(以下略)

もの思ふ秋。